

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 曾我物語の史的研究

氏名 坂井孝一

本論文は、建久4年(1193)5月28日深夜、源頼朝の主催する富士の裾野いわゆる富士野の狩りにおいて、曾我十郎祐成・五郎時致の若い兄弟が、実父河津三郎の仇敵、鎌倉幕府の有力御家人工藤左衛門尉祐経を討ち、自らも壮烈な最期を遂げた事件(以下、これを曾我事件と呼ぶ)を中心に、曾我兄弟の生涯を浪漫的に叙述した軍記物語『曾我物語』を歴史学の立場から考察した研究である。

無論、『曾我物語』には文学的脚色・虚構が含まれ、その叙述のみをもって史実を論じることは難しい。しかし、『吾妻鏡』『玉葉』などの歴史編纂物・記録類との丹念な比較を通し、叙述の性格・意義を分析することによって、幕府成立期の歴史の断面を解明することは十分に可能であると考え。また、頼朝の流人時代、挙兵に至るまでの過程、古代末期の東国武士団のあり方を探る手がかりが得られるという点でも、『曾我物語』は貴重な史料であると考え。序章では、まず『曾我物語』の現存諸本、とくに鎌倉末期の東国で成立したとされる真名(=漢字)表記のテキスト「真名本」、南北朝・室町期に京都周辺で成立したとされる漢字仮名交じり表記のテキスト「仮名本」の二系統の現存諸本について説明し、次いで文学・民俗学・歴史学の先行研究を概観した。文学・民俗学では、「曾我語り」「御霊信仰」「唱導」に着目した角川源義と福田晃の「真名本」に関する研究が重要であり、歴史学では三浦周行の《北条時政黒幕説》、石井進の「真名本」を用いた東国武士団の研究、『吾妻鏡』と「真名本」をペアの作品とみる五味文彦の研究が注目すべきであるとした。その他、歴史小説家永井路子の《クーデター説》も示唆に富んだ研究であると評価した。これらの先行研究をふまえ、第一部『曾我物語』と「曾我事件」、第二部『曾我物語』の人物論、第三部『曾我物語』の中世的展開という三部構成で、『曾我物語』に対し多角的に史的研究を行った。

第一部は、「真名本」及び『吾妻鏡』の文学作品・史料としての性格、曾我事件の実像と歴史的意義について解明した。第一章では、「真名本」は頼朝を主人公とするいわば「頼朝物語」と、曾我兄弟の祖父伊東祐親と仇敵工藤祐経との対立を主題とするいわば「伊東物語」を無理

やりに結び付けており、ために随所で矛盾が生じていることを指摘した。また、年代記的叙述を取りながら年代が正確でないこと、兄弟を貧しく不遇な若者として描く「貧道の物語」とでも呼ぶべき構想があること、「狩庭の物語」という構想を持ちながら「狩獵者の物語」とまでは言えないこと、祐親を頼朝に対する「不忠の敵人」とみなす構想が色濃く見られ、それが物語に破綻をきたす原因になっていることなどの諸点を指摘した。

第二章では、『吾妻鏡』建久4年5月28日条と「真名本」の叙述を比較検討し、『吾妻鏡』の編纂時には、幕府に伝来した実録的な記録類、「真名本」のもととなったものと同一の原初的な「曾我」の物語、それとは別の物語である「曾我記」などの原史料があり、編纂者は記録類を基本に置きつつ各種の物語の内容や表現を取捨選択して組み合わせ、史書としての体裁を整えるために特筆部分を追記したとの結論を得た。

第三章では、『吾妻鏡』に見える〈曾我の雨〉の叙述、「將軍」・「山神」という語に着目し、編纂者が記録類に次いで重視したのは「真名本」の原史料の「曾我」の物語ではなく、「狩獵」を業とし、武芸を職能とする武士の感覚・信仰を伝える「曾我記」であったとした。第四章では、建久3・4年、絶頂期を迎えた征夷大將軍の頼朝が、永福寺の落慶供養や一連の狩りの催行により、〈都の王権〉に比肩すべき〈東国の王権〉の主宰者であることを表明しようとしたこと、その方向性に違和感・不満を持つ御家人たちがいたこと、武士団内部や武士団相互に対立の火種が醸成されていたこと、建久4年前半には相模・武蔵でそうした確執が表面化し、伊豆では工藤祐経に対する北条時政の敵意が生まれていたことを指摘した。

第五章では、『吾妻鏡』建久4年の曾我関係の記事と「真名本」の叙述との異同に着目し、事件当日・翌日の五月廿八日条・廿九日条に関して、《何らかの事情》により『吾妻鏡』の編纂時には原史料とすべき記録類が失われていた可能性があるという仮説を提示した。そして、編纂物の『吾妻鏡』と文学作品の「真名本」のみによる曾我事件の解明は難しいことから、《何らかの事情》について考察する必要があることを指摘した。

第六章では、まず《北条時政黒幕説》・《クーデター説》の検討から、『吾妻鏡』と「真名本」の描く曾我事件とは異なる歴史像が描き得ることを導き出し、次いで『吾妻鏡』に見える曾我事件前後の記事の検討から、《何らかの事情》とは頼朝・時政・八田知家らの中

心とした体制引き締め陰謀と、大庭景義・岡崎義実ら体制に不満を持つ御家人たちの富士野での〈暴発〉を意図的に隠蔽し、情報を操作したことにあると指摘した。曾我事件後、頼朝は源氏一門を肅清することにより政権基盤を安定させ、上洛して〈東国の王権〉の実現に向けて突き進むが、その契機となったのが曾我事件であったと結論した。

第二部では「真名本」を平安末・鎌倉初期の重要史料と位置づけ、『吾妻鏡』の記事と合せて当該時期の東国社会の歴史像、武士たちの人物像を明らかにした。第一章では、「真名本」巻1の叙述から、伊東祐親・工藤祐経の所領相論が久須美荘の中心である伊東荘の領有権に限られること、祐親が祐経を退けた後、河津三郎の遺児一万・管王兄弟を母とともに曾我に移したのは、自身が体験した相論を教訓とした策であったことなどを明らかにした。

第二章では、「真名本」巻1・5の叙述から、祐親の婚姻ネットワークが伊東氏・三浦氏・狩野氏などの軍事的・政治的思惑や、平氏政権の動向、源氏と伊豆国との根深い結びつき、所領相続をめぐる伊東氏の内部事情、祐親が展開する海上・陸上交通を通じた相模・武蔵の武士団との連携といった要素が絡み合って形成されたものであったことを解明した。なお、考察の過程で曾我の母・工藤祐経の生年を推定したが、同様の方法を用いて祐親やその長女、祐経とその父祐継の生年などを推定したのが補論である。

第三章では、頼朝の21年間の流人時代のうち16年にも及ぶ伊東での生活にもっと注目すべきことを提言し、「真名本」巻1～3・5の叙述から、頼朝配流時の伊東氏の当主が祐親ではなく祐経の父祐継であったこと、祐継死後の祐親による所領経営のためのネットワーク形成が、北条に移ってからの頼朝の挙兵に大きな影響を与えたことを導き出した。第四章では、『吾妻鏡』を主な史料として、曾我兄弟の仇敵工藤祐経が都的な教養・経験・

人脈によって都志向の強い頼朝に重用された〈特異な御家人〉であったこと、その一方で、北条時政ら挙兵当初より頼朝に従って戦ってきた武芸・武勇を尊ぶ東国武士たちは反感感情を抱いていたことを明らかにし、曾我事件の背景として注意すべきであると指摘した。

第五章では、「真名本」での叙述が少ないが故に研究対象とされてこなかった曾我兄弟の継父曾我祐信に着目し、「真名本」巻1・4・10の叙述や、『吾妻鏡』治承4年（1180）・元暦元年（1184）・文治元年（1185）の記事から、「真名本」では祐信の人物像が、似

た境遇にある曾我の母の形象の中に解消され、祐信の言動も母の言動であったかのように叙述されていること、『吾妻鏡』を用いて御家人としての祐信の行動を探ると、「真名本」巻4における兄弟の年齢と年号のズレという謎も解けることなどの諸点を明らかにした。

第六章では、前章での祐信に対する考察をふまえ、兄一万の元服、弟管王の管根入山、兄弟の異母兄祐綱の初の御家人役勤仕が、文治元年10月・11月という近接した時期に集中して見られるのは、狭小な所領曾我荘しか持たない祐信の家の経済事情や、祐信から祐綱への世代交代という事情によるものであったことを明らかにした。

第三部では、『曾我物語』の軍記物語としての側面や、能の「曾我物」という『曾我物語』の発展の様相について考察した。第一章では、ヨーロッパ中世の英雄叙事詩と異なり、日本中世の軍記物語は戦闘場面での「血の叙述」がほとんどないという特徴を、「真名本」の〈十番切り〉の叙述から抽出し、その文化的背景として、キリスト教・「供養」思想と対照的な、神祇信仰・仏教に基づいた「食べる文化」「供養の文化」の存在を指摘した。

第二章では、「曾我物」の作品を概観することによって、能と「真名本」との近似性や、都の享受者が受け入れやすい身近なテーマが選ばれていることなどを指摘し、最初期の「曾我物」の能『元服曾我』に着目した。そして、「真名本」とは違う兄の手による路次での元服という能独自の異常な設定は、北条時政をあえて烏帽子親にしなかったことによるものであり、それは作者に比定される宮増の創作であった可能性が高いと結論した。

以上、『曾我物語』とくに「真名本」と曾我事件に対し、三部にわたって歴史学的な考察を加えた。そもそも曾我事件は歴史上の事件であり、『曾我物語』は長く日本人の心を捉えてきた作品である。単に文学的・民俗学的に研究するだけでなく、史的に研究することによって、『曾我物語』はいっそう多くのことを現代の我々に教えてくれる。間違いなく中世初頭の歴史を解き明かすための重要史料であり、日本人にとっての貴重な財産である。